

# 大岡昇平とフィリピン

— 『レイテ戦記』をめぐって —

俞 琦

## 一、フィリピン人への視点の意義

戦後日本の作家の中で大岡昇平ほど、アジアの問題を自分の作品の中に取り込み、書き続けた作家は稀である。

戦場での体験をもとにして書いた「俘虜記」(『文学界』、一九四八年八月)、『野火』(『展望』、一九五一年一月〜六月)など一連の初期の作品から、第二次世界大戦中の日米両軍の大決戦を描いた長編の作品『レイテ戦記』(『中央公論』一九六七年一月号〜六九年七月号)に連載。単行本は一九七一年九月中央公論社より刊行)まで、大岡は、自分が戦争末期兵士として送られたアジアの国、フィリピンを描き続けていた。特に、戦争体験をめぐる個人とフィリピンとの関わりを描いた初期の作品とは違って、戦後二十五年に発表した『レイテ戦記』において、日本とフィリピン、アメリカとフィリピンとの関わりを深く探り、戦争の全体の中でフィリピンの問題を捉えようと

していた。『レイテ戦記』の結びで、大岡は次のようなことを述べている(1)。

太平洋戦争はアメリカの極東政策と日本の資本家の資源の確保の必要との衝突として捉えるのが適切であるならば、二つの軍事技術が、哀れなフィリピン人の犠牲において、群島中の一つの農業島の攻防戦に尖端的な表現を見出したのが、レイテ島をめぐる日米陸海軍の格闘であったといえよう。(『エピソード』)

ここで「国家と資本家の利益のため」という戦争の本質を明らかにしようとすると同時に、この戦争が「哀れなフィリピン人の犠牲」のもとに行われたという事実をも指摘しなければならなかった。そして、戦争のために「哀れな」フィリピン人がどんな「犠牲」を強いられ、いたのか、それを解明しようとして、『レイテ戦記』でフィリピン人が蒙った被害を詳細に描き、さらに単行本

が出版するにあたって現在に至るまでのフィリピンの現代史を作品の末尾に付け加える等、大幅な加筆訂正を行った。

『レイテ戦記』試論(『民主文学』、一九七三年五月)でフィリピン人への視点に触れた池内克郎は、「レイテ戦の意味は、いや世界大戦の意味は、戦いの直接の参加者にとってのみ存在するのではない。『レイテ戦記』におけるフィリピンの現代史は、おそらくそのような意味で不可分のものであったのだ。」とその意義を高く評価した。さらに、「フィリピンの現代史が書き加えられたことによって、『レイテ戦記』は、沖繩の歴史や国内にアメリカの基地をもつ日本の現実を、独立を求めて闘うベトナムを含めた東南アジアでのアメリカの犯罪性を、鋭く貫く視点を獲得した。」と、その作品の書かれた当時の意味を強調している。

レイテ島地上戦闘に関しては、日本防衛庁防衛研修室が編纂した『捷号陸軍作戦(1)―レイテ決戦』(朝雲出版社、一九七〇年一二月)、『昭和史の天皇 13』(読売新聞社、一九七〇年)のような詳しい戦史がある。だが、前者は作戦の計画と指導を中心に記述したものであり、戦争の進行と勝敗の結果のみ記録され、後者は当事者の個人的な経験の回想で綴られている。どれもこの戦争の最

も大きな被害者であるフィリピン人の姿は描かれていない。これらの戦記、戦史を見るかぎり、まさに池内克郎が指摘したように、戦争は直接戦った者同士の間で行われており、結局彼らにのみ意味があるものだという「恐ろしい」結論になりかねない。

戦争参加者しか書かれていない戦記や戦史が世に溢れ、さらに戦地で行われた住民への残虐行為などの描写がタブーとされてきた時期に、フィリピン人への視点を作品に取り入れ、戦争の真相を全面的に解明しようとする『レイテ戦記』の刊行が意味深いものであることは、いうまでもない(2)。作者大岡にとっても、『レイテ戦記』は自己とフィリピンとの数十年にわたる関わりから得たフィリピン認識の総括という意味で大きな意義があると思う。本稿は『レイテ戦記』を一つの手がかりとして大岡昇平とフィリピンについて具体的に検討するものである。

## 二、フィリピン人への視点の確立

戦前スタンダードル研究者だった大岡にアジアの国、フィリピンの認識をもたらしたのは、ヨーロッパのように文学などの文字を介したのではなく、国家の強制に

よる戦争体験という直接的なものだった。補充兵としてフィリピンに配属され、駐屯、敗走、捕虜という一年余りの体験を通して、大岡は戦争により家を追われ、田園が焦土となったフィリピンとフィリピン人の存在を身近で認識していた。初期の作品「俘虜記」、「野火」は、そのフィリピンでの戦争体験を書いたものであり、無論、戦場と化したフィリピンの荒廃の様子やフィリピン人の悲惨な姿が作品にしばしば見られる。が、注意すべきなのは、フィリピンやフィリピン人がこれらの作品に登場しているにも拘らず、『レイテ戦記』で行われたような戦争とフィリピンとの関わりという問題の追求は、ここでは行われなかったことである。

たとえば、『野火』には、敗走中の日本兵が食糧を探すためにフィリピン人の畑で芋を掘ったという一節がある。飢えに迫られた主人公田村は「比島人の山の畑」を発見し、「日本の敗残兵が食糧を漁っているこの山間に、こういう畑が残されていたことは奇跡に近かった。」と喜んでいる。が、作者の筆は「もし私がロビンソン・クルーソーであったら、ここで土に跪いて神に感謝を捧げたであろう。極東の無神論者にとっても、これは確かに何者かに感謝すべき情況であったが、なにに感謝しているか私にはわからなかった。」（鶏鳴）という田村の心

情の描写にとどまっておらず、それ以上の追求はしていない。

『レイテ戦記』にも、レイテ戦放棄後島に残された日本軍の残存部隊の敗走が描かれている。たとえば、「今堀部隊長自ら畑を探して芋を掘り、バナナを採った。」（「エピソード」）という記述がある。無論、苛酷な敗走体験を持つ元兵士だった大岡は生存の危機に迫いつめられた兵士たちの悲惨な運命に同情の念を抱き、「兵を飢えしめないのは、無論軍の責任である。ところが大本營が太平洋戦線一帯で取った遷延作戦では、その責任を放棄していた。」(3)と、無謀な作戦を立てた軍の上層部に怒りを発している。が、さらに「日本兵は危機における自衛という動物的反応によって、中国人やフィリピン人の幸福追求の権利を奪いつつあると意識することはなかった。アメリカ兵もまた国内に存在する人種的差別によって目かくしされ、アジア民族に対する加害者であることを意識しなかった。」と書いたように、日本軍兵士やアメリカ軍兵士の行為に対しても厳しい批判の目を見せている。

『レイテ戦記』連載終了後、古山高麗雄との対談「戦争体験と文学」（『季刊芸術』、一九七〇年四月）の中で、大岡は次のようなことを語った。（傍点は引用者）

こういうことを考えるんですよ。戦後、最初の戦争ものは、戦争はひどいものだということから出発しましたね。軍人がいかに悪いやつか、まずそれから出た。軍人に対する反感と、戦場の事実を暴露的に書いた段階ね。そういう自分の恨みつらみから軍人を見るのは間違っているんであって、結局、自分も、軍人がこういう戦争をすることを容認したのではないか、自分も責任をとらなければならぬという考えですよ。もっともそれではまた手からこぼれるものが出て来るんですが、とにかくわれわれの軍隊の条件はあまりにも苛酷であつたから、いかに軍部が悪いか、戦争が悲惨であるかということだけに頭が行きたがるんですけど、そんなら自分がどんな悪いことをしてきたかということは一切ことばに出来ないわけだよ。ね。(中略)そういうふうなわれわれ自身を見られるような段階になるまで二十五年かかったんだな、結局。

国家の強制で戦場に駆り出され、生と死の淵をさまようことを強いられた兵士を描いた『俘虜記』や『野火』には、軍の上層部に対する批判が貫かれ、ある意味では「軍人に対する反感と、戦場の事実を暴露的に書いた段階」の産物といえる。つまり、これらの作品において、

兵士としての自分は常に悪として糾弾される軍の対極におかれ、いわば国の強制の「犠牲者」か軍の「被害者」として自分自身を拡大視しているのである。大岡は後に「不当な圧制者として」来た「自分の存在がフィリピン人にとって不愉快なものであること」を「いつも感じ」(4)ると、戦争におかれた自分とフィリピン人との関係の歪みに気づいた当時の心情を語ったことがある。が、「フィリピン人もかわいそうだけれど、われわれもかわいそうなんだ」(5)という意識が『俘虜記』の△私Vや『野火』の田村のような兵士の描写の根底にあり、むしろ「われわれ」という「被害者」たる兵士像が初期の作品には中心に置かれている。結局、作者の目は生存の危機に追いつめられた兵士たちの心理と行動に向けられ、彼らの行為が現地の住民にとって何を意味するかについては描かれなかった。いわば戦争のもう一方の「被害者」であるフィリピンは、作者の捉えようとする対象にならず、極限状態に生きる兵士たちの生と死の問題を追求するための舞台に過ぎなかつたのである。

しかし、『レイテ戦記』においては、日本兵やアメリカ兵の行為が「中国人やフィリピン人の幸福追求の権利を奪い」、「アジア民族に対する加害者である」という事実を明らかにするのみならず、さらに戦争と現地住民との

関わりを、フィリピンの現代史を通して説明しようとする姿勢を示している。この膨大な戦記に直接参戦者と見られないフィリピン人への視点を取り入れなければならぬ必要性は、恐らく次のような認識から来るのだろう。

レイテ戦史で、とかく人が忘れがちなのは、フィリピン人の存在である。一九四四年末から一九四五年へかけて、日米両軍がフィリピンを決戦場を選び、互いに大軍を送って幾月も戦った。それは双方に赫々たる武勲と悲惨な壊滅の記憶を残した。ゲリラは「白い天使」米軍が、「猿のような」日本人を自分の国から追払ってくれるのに協力した。しかし多くのフィリピン人民は、家を焼かれ、女子を犯され、財産を掠められた。

短い作戦期間中は山に隠れていればよかった。しかしその前に日本軍占領の三年の歳月があった。日本の軍政、ラウルルのかいらい政府の下で、国民全体の欠乏とインフレと非衛生状態が進行した。(中略)

三〇〇年来外国人に支配されていたこの国には、反抗と蜂起の伝統がある。同時に腐敗もあらゆる階層に浸透していて、万事歪んだ現れ方をする。しかし結局ここはフィリピン人の国である。どんな小さ

な土地にも、ここで生れ、働き、死んで行く人達の生活がかかっている。

これは一九六七年三月、『レイテ戦記』取材のためにフィリピンを再訪した際の印象をまとめた「ミンドロ島再び」(『海』、一九六九年八月)の中の一節である。二十年ぶりに再訪した大岡は、「日本人の頭を二つに切りた」という西瓜売りと「痛撃」的な体験をし、「戦争中一〇〇万人を殺された怨恨は、二五年では消えないだろう」という、戦争が残した問題の深刻さを知らされ、「万事歪んだ現れ方をする」というような、他国の利害の衝突で国を破壊された悲惨な現実が、この国でいまなお終わっていないことを改めて認識した。このような「どんな小さな土地にも、ここで生れ、働き、死んで行く人達の生活がかかっている」という認識、つまり、フィリピンという他者の視点を自分の内部に取り込んでから、はじめて「われわれ自身を見られる」という視点が可能になるのではないかと思われる。

### 三、改稿とマッカーサーのフィリピン解放

『中央公論』に連載した『レイテ戦記』の最終回「エピローグ」の末尾に、「スペイン人はよくなかった。アメ

リカ人は悪かった。日本人は一層悪かった。しかし最低なのは二度目に来たアメリカ人だ。」という、あるフィリピン老人の意味深い話が引用されている。五十年間四代にわたって違った支配国の交替を体験した、このフィリピン老人の証言に、戦争によって莫大な被害を受けたのみならず、戦後も他国の支配下におかれた人たちの不幸が感じられる。作者がこの現地人の証言を引用する意図も、恐らく戦争がもたらした災害、さらに何百年もの間外国の植民地支配に苦しんでいた、フィリピン人の惨めさを表そうとするところにあるだろう。「エピローグ」の後半に、「しかししめてみれば歴史的なレイテ島の戦いの結果、一番ひどい目に会ったのはレイテ島に住むフィリピン人だったということが出来よう。」という記述があり、またそれを論証するように、日本軍とアメリカ軍がフィリピンに与えた被害が書かれている。が、ここでは戦争とフィリピンの関わりについて深く立ち入らず、「これらはすでに『レイテ戦記』の範囲を越えた問題である。」という一文で、この二年七ヶ月にわたった長い連載が締めくくられたのである。

『レイテ戦記』の最初の単行本は、連載が終了して二年後、一九七一年九月、中央公論社から刊行された。この単行本及び後の文庫本、全集の刊行にあたって、記述

の訂正や加筆など、大幅な改作が行われている。これらの加筆訂正の多くは、連載後に発見した資料に基づいた地名、人名、人数などの事実の修正であるが、また「完全消耗持久の方針」で戦わせた軍の「残酷」と「不仁」を非難するような加筆もしばしば見られる。が、改作の最大の特徴は、フィリピンに関する大量の加筆と増補にあると思う。単行本刊行の際、「ゲリラ」の章がたてられ、「エピローグ」にも三分の一ぐらいフィリピンの現代史が増補されるほかに、さらに各版本刊行の段階でも数多くの加筆が施されている(6)。紙面の関係で詳細な検討はできないが、改作の最も多い「エピローグ」の中のいくつかの例をここで見たい(7)。(傍点は引用者。上の引用文と同じ場合、・・・と略す。)

<p>初出、『中央公論』</p> <p>「アイ・シャル・リターン」の約束はそれでなければ完全に果たされたとはいえなかった。</p>	<p>単行本、中央公論社</p> <p>……の約束は、フィリピン全土をアメリカ軍の手で解放しなければ、完全に果たされたとはいえない、と思ひ込んでいたのである。</p>	<p>同 上</p> <p>全集10、岩波書店</p>
<p>ビザヤ・ミンダナオの裁定、日米両軍の夥しい死傷はアメリカの国家的利害のために起こったものである。</p>	<p>……死傷はフィリピンの解放のためではなく、マッカーサーの軍人の情念とアメリカの国家的利害のために起こったものである。</p>	<p>同 上</p>
<p>無</p>	<p>フィリピン全体で、米軍はフィリピンの公共施設の八〇パーセント、個人財産の六〇パーセントを破壊した。</p>	<p>同 上</p>
<p>アメリカ人はフィリピン人と同じ条件で実業に従事することができた。</p>	<p>アメリカ人がフィリピン人と同じ条件で実業に従事出来るのは、独立前と同じであつた。</p>	<p>アメリカ人はフィリピン人と同じ条件で実業に従事出来ることになつたので、すべては独立前より悪くなつた。</p>
<p>フィリピンを米軍と地主の思うように解放することが、マッカーサーの目的だつた。</p>	<p>フィリピンを人民の幸福のためではなく、アメリカとフィリピンの地主資本の利益になるように解放するのが、マッカーサーの目的だつた。</p>	<p>同 上</p>
<p>フィリピンは一八九五年から一九四五年まで五〇年の間に四度主人を替えたことになる。一八九八年までのスペイン、一九四一年までのアメリカ、四五年までの日本、その後のアメリカである。</p>	<p>同 上</p>	<p>……、その後の再びのアメリカである。</p>

傍点を振った部分を見ればわかるように、記述を書き換えるたびにアメリカ軍のフィリピン「解放」に対する作者の批判が厳しくなっている。「この点（アメリカの再占領 引用者註）を確かめるには、フィリピンの戦後史を知る必要があった。そのため私は連載が終わってからも調査を続け、約八十枚を書き足すことになった。」

(8)という作者の言葉によれば、「エピソード」の大量の加筆と増補の中心は、マッカーサーの「解放」の意味の究明にあるといえる。つまり、戦前から戦後にわたるフィリピンの現代史の導入を通して、「あなたの国を救い、あなたの国民を解放」した(9)といったマッカーサーの「解放」宣言を裏返し、その「解放」及びアメリカによる戦後処置は「実質的にはフィリピンの再占領、再植民地支配であった」という結論を導きだしたのである。「マッカーサーの軍人の情念」を見出すことができたのは小説家としての鋭い洞察力によるものであるが、「フィリピンを人民の幸福のためではなく、アメリカとフィリピンの地主資本の利益になるように解放するのが、マッカーサーの目的だった。」という認識の根底には前述のフィリピン老人の目も存在するのだろう。あるフィリピン歴史家の指摘に大岡の見解と同様なものが見られる。

マッカーサーの行った選択は、必然的に、極端に右寄りな彼の政治見解を反映したものとなった。

フィリピンに対する彼の政策の根本は、戦前の状態への復帰、すなわち、強力な親米派指導部に指導された社会、経済的には合衆国に従属したアメリカの企業に機会を提供する社会、左派の危険思想からは隔離された社会の回復にあった。

一九四四年九月の陸軍省あて書簡の中でかれ自身が主張しているように、マッカーサーの目的は「フィリピンの経済を戦前どおりの姿に復興すること」であった。そこで彼の政策の一切は、その根本的にそうものとなったのである。(レナト・コンスタンティノ『フィリピン民衆の歴史 3』（池端雪浦他訳、井村文化事業社、一九七八年）

『レイテ戦記』より後に刊行されたレナト・コンスタンティノの『フィリピン民衆の歴史』は、大岡には「痛憤的愛国的に映る」(10)のである。同じように、フィリピンの苦難と怨恨に満ちた現代史を書く大岡の筆から、われわれにはフィリピン人に対する作者の同情にとどまらず、占領者の卑劣な行為に対する憤激が感じられる。

フィリピンは日米決戦場となったため、多くの人民が殺され、土地が荒廃しただけではなく、戦後は

アメリカによって再占領され、一層ひどい植民地支配の軛の下におかれた。大地主と調達資本が温存されたため、かつて東洋において最も民主主義的であったコモンウェルスが、韓国、台湾のような、戦後生まれた従属国よりも工業化がおくれた。今日も最も前近代的な反乱と革命が起る可能性を持つ国になった。(『エピソード』)

#### 四、戦争におけるフィリピン人への眼差し

『レイテ戦記』は、フィリピン人への視点を取り入れることによって、戦争をさらに多面的に描いた作品として、戦争参加者を中心にした戦史、戦記をはるかに超えるものである。が、フィリピン人を対象とする視点が十分であるかについては、まだ検討の余地があると思う。

たとえば、小田実が対談「国家、南方、戦争」(『群像』、一九七三年三月)の中で、自分が『レイテ戦記』を読んで「たいへん感動しました」と述べ、その理由の一つに「最大の被害者はフィリピンの人たちである、というのが結論なのですが、そういう視点をほつきり書かれていることに私は圧倒的な感動を受けた。」とした一方、また「そういう結論はありながら、それではフィリピン

人の視点がこの作品にどれだけ込められているだろうかという点になると、そこはまだ十分でないという感じがしたんです。」といった「不満」も漏らしている。寺田透も『レイテ戦記』論(『文芸』、一九七六年二月)で、この戦記にフィリピン人が日米「両軍によって町を破壊される不在の存在」として書かれたことを指摘し、「レイテのフィリピン人はかれらの行為ではない戦争と、他でもないレイテの山野の自然のためにどこかに追い払はれてしまったときへ、感ぜられる。こんなにもひとつのゐない島があらうかといふ感じで、戦場は眺められる。」という。確かに、レイテ戦前のフィリピン人ゲリラの活動に触れた「ゲリラ」と、フィリピン人の現代史を中心に書いた「エピソード」の後半の記述を除けば、この長い戦記では現地住民の姿がほとんど見られない。まさに寺田透のいったような「不在の存在」としか書かれていないのだ。

前述の小田実の「不満」に対して、大岡は、「戦争が始まるとレイテ島ではフィリピン人は全部山へ入っていなくなっちゃったんです。そうすると、かわり合いいうのがないんですね。(中略)一九四四年に増援軍があがったときは、みんなフラフラになっていて、何も悪いことするひまなかったわけなので、十六師団牧野師団長

が、戦死したせいもあるけど、B級戦犯はレイテ関係では一人も出ていない。あまり戦争がひどかったから何も悪いことするひまなかったんですよ。」(前掲)と「弁解」した。もし「フィリピン人は全部山へ入っ」たということが事実であれば、一九四四年十月二十日アメリカ軍上陸から、翌年一月二十日日本軍の「地号作戦」(レイテ決戦放棄後、残された部隊を脱出させる作戦 筆者註)の終結まで、レイテ島での戦闘を中心に描いたこの戦記にフィリピン人が登場しないのは、不思議なことではない。だが、事實は、アメリカ軍と共にゲリラも戻って一部の戦闘に参加し、彼らの制圧した地区には、レイテ島の住民も続々と帰って来ていたのである。そのため、大規模な戦闘が終了した後、島に残された小部隊及び離散した兵士とフィリピン人との摩擦がしばしば起こった。これは、『レイテ戦記』の記述の中にも少しは見られ、またレイテ戦放棄後の日本兵とフィリピン人とが接触した事実も、部分的に書かれてはいる。たとえば、フィリピン住民を先頭に立たせアメリカ兵の目をだましその陣地に斬込んだ事実(「上陸」)、十六師団衛生兵伊藤上等兵らがゲリラの待伏せにあつてブラウエンへの進撃を阻止された事実(「ブラウエンの戦い」)、「住民がみな敵であるフィリピンでは、部隊を離れた孤兵に生きる道はなく、

結局、殺されるか、捕虜になったのであった。」(「カンギポット」)といった記述の裏には、フィリピン人の存在が明らかである。しかし、このような戦場にいたフィリピン人の視点から書かれた記述は、『レイテ戦記』にはほとんど見られない。

アメリカのライフ社の写真集『第二次世界大戦史 フィリピン人の激戦』(Rafael Steinberg, Return to the Philippine, 1978 水谷曉訳)は、レイテのゲリラの写真を二枚載せている。一枚は時間の断定ができないが、もう一枚は「レイテ進攻作戦を支援して日本逃亡兵を捜索中のゲリラ部隊が日本兵のひそんでいそうな小屋に接近して行く」という記事があるため、レイテ戦中か終了直後に撮ったものと推測できる(「この写真を撮った人が二、三日後戦死した」という説明からみれば、激戦の最中とも考えられる)。この写真と「すべての島でゲリラ集団はアメリカ軍の進攻に時を合わせて力の限りを尽くした。」という記述から、フィリピンのゲリラがレイテ戦に参加した事実を少しは確認できると思う。ただし、全体的に言えば、第二次世界大戦中のフィリピンゲリラに関する文献が少ないのは事実であり、少なくとも日本に入つたものがごく少数に限られているとは言える(II)。

フィリピン人ゲリラの抵抗運動は、コンスタンティー

ノによれば、「ほとんど完全と見えるほどに、米軍作戦の必要性、さらには太平洋地域で指揮をとるダグラス・マッカーサー將軍の指令に屈従するものであった」(前掲)という。また「抵抗運動が圧倒的に軍人に指揮されたこと、なかんづくマッカーサーに監督されたことのために、ゲリラ集団は一つの例外を除いて、社会哲学と戦後期に備える計画を欠くことになった。」という問題も

コンスタンティーンによつて指摘されている。マッカーサーが抵抗運動を自分の指揮下に入れるのは、「自分のフィリピン再征服に有利となるような強力なゲリラ活動を欲していた。」(コンスタンティーン)という政治的目的のためである。一方、戦闘中、アメリカの指揮官は「フィリピン兵を主要な戦闘には参加させない」という命令を出している。この点については、「フィリピン兵の素質を考慮したためか、または自力解放の実績を与えないための政治的処置と思われる。」(「ダムラアン」と

いうように、大岡にも指摘がある。これらの事実をまとめてみれば、マッカーサーは「自分のフィリピンの再征服(コンスタンティーン)の目的にもとづいて、フィリピンの抵抗運動を指揮しながら、彼らに「自力解放の実績をあたえ」ず、「アメリカ軍の手で解放し」た(大岡)という事実を作らうとしたといえる。逆に、フィリピン

の抵抗運動も、「政治目的や社会的プログラムを欠いて」て、自ら「米國権力の復帰という構図の枠内」(コンスタンティーン)におかれたのである。戦後、フィリピン人ゲリラに関する記録が少ないのは、こういう当時の状況と関係があるのだろう。

フィリピン人ゲリラの資料が不足していることが、考えてみれば、『レイテ戦記』にフィリピン人の視点が少ない理由の一つとなるかもしれない<sup>(2)</sup>。そして、こういう資料の不足を補うために行つた当事者とのインタビューも、物理的に困難である。そのため、日本軍兵士を描くように証言を取入れ生きたフィリピン人の像を作ることには、できなかった。『レイテ戦記』にフィリピン人の視点を十分に取入れられなかったのは、このような外的条件の制限も考えることができるだろう。

## 五、おわりに

大岡昇平とフィリピンを取り上げたものに、大江健三郎の「大岡昇平とフィリピン」(日本アジア・アフリカ作家会議編『戦争とアジア』、毎日新聞社、一九七八年十二月)がある。その中で大江は『レイテ戦記』について、「氏のヨーロッパと日本の出会いの中に、実はアジアの

問題が入っていました。具体的には、『レイテ戦記』を書くことによって、アジアの問題というものをしだいに自分の中に導入していった。」と指摘した。つまり、「日本の近代化にあたっての、ヨーロッパと日本との出会い、衝突」という大岡氏の「根本的なテマテイク」が、フィリピン人の視点の導入から生まれたアジアの問題に対する「反省」によって、「今後日本の近代化というものは、ヨーロッパとの出会い、衝突ということを考えると同時に、アジアとの出会い、衝突ということを、新しい見方ととらえ込まなければならない」という新しい「テマテイク」に変わったという。

確かに、「レイテ戦史で、とかく人が忘れがちな」フィリピン人の存在を長い戦記に書き留め、さらに歴史的観点から戦争をとらえ、現地住民に与える影響を示そうとすることに、大きな意義がある。しかし、アメリカの「解放」を中心にした改作に示されたように、戦争とフィリピンに関する記述において、作者の追求の重心がその「解放」をめぐる米比関係に傾いており、一方、日比関係については深く掘り下げることがなかった。たとえば、「ゲリラ」と「エピソード」で日本軍とフィリピンの関わりについて触れてはいるが、戦記の大半を占める日米両軍の決戦の詳しい検討とその後の米比関係の追求

と比べて、それらの記述は少ないのである。作者がフィリピン人を対象とする視点の導入によってアジア問題を自分の文学に取り込むことはできたといえるが、日米関係、米比関係における、日比関係の位置づけこそを明らかにしなければ、真の意味での新しい「テマテイク」が生まれたいのではないかと思われる。無論、『レイテ戦記』は「自分の個人的被害者の立場」<sup>(1)</sup>を離れ、直接参加者のみならず、すべての人に対して戦争が意味するものを解明しようとする作者の新しい姿勢を示しており、これが大岡文学のみならず、戦後の日本戦争文学にとっても貴重なものであることはいうをまたない。

註

- (1) 岩波書店版全集第九、十巻『レイテ戦記』は決定版であり、本稿の引用文は注をつけたものを除いてすべてそれによる。
- (2) 高橋三郎は「戦記もの」のタブーの一つに「自分の不名誉になるようなこと」を書かないという事実を指摘している。それによれば、「現地住民に対する強姦や殺人、人肉食などについて書かれるようになったのは昭和五十年代以降のことです」という（『戦記もの』を読む―戦争体験と戦後日本社会』、『アカデミア』一九八八年）。また文学作品にもこのような傾向が見られる。たとえば、藤原彰は、司馬遼太郎の小説

『坂の上の雲』(『サンケイ新聞』、一九六八年四月十三日、一九七三年八月四日) について「ベスト・セラーになっている司馬遼太郎さんの『坂の上の雲』はそのこと(中国民衆が被害を受けたこと 引用者註)を書いていない。日本兵のことと、中国人のことが全然視野に入っていないんです。中国を戦場にして、どれだけの人が死に、どれだけ戦争の惨禍を与えているのかという痛切な認識なしに書かれているような感じがします。」(対談「アジア侵略と天皇の軍隊」、『歴史評論』、一九七三年一月) という鋭い批判をしている。

(3) 初出には「軍の義務」とあるが、単行本の段階では「軍の責任」と書換えた。

(4) 「ミンドロ島再び」(『海』、一九六九年八月)

(5) 大岡昇平、古山高麗雄、対談「戦争体験と文学」(『季刊芸術』、一九七〇年四月)

(6) 『レイテ戦記』は連載、単行本のほかに、普及版(一九七二年八月)、中央公論社版全集(一九七四年七月)、中公文庫版(一九七四年九、十、十一月)、岩波書店版全集(一九八三年九月)がある。連載後の訂正加筆の過程については岩波書店版全集10の「解題」(池田純彦)に詳しい。具体的な例を見れば、次のような三つの傾向がある。一つは、「カガヤン溪谷の尚武兵団」(初出)を「バレテ峠の尚武兵団」(単行本)に、「日本軍二個大隊二〇〇〇人」(初出)を、「二個大隊一五〇〇人」(単行本)、「二個中隊五〇〇人」(『岩波全集10』)に、というような事実の修正。また「一般国民は国家の利益のほかに、おのおの個人的家族的な利益を持っている。従って軍が徴募兵に戦いを続けさせる条件の維持に失敗した場合、降伏を命令しなければならぬ。」(初出)を、「一般国民にこれを課するのは治者として残酷であり、不仁である。国民は国家の利益のほかに、おのおの個人的家族的な幸福追求の権利を持っている。従って、・・・。」(『岩波全集』)に、というような軍部批判に関するもの。フィリピンに関する増補が最も多いが、ほかに「戦闘中に捉えられた者」(単行本)を「戦闘中に負傷収容された者」(『岩波全集』)に、「人肉喰いを冒すもの、冒さないもの」(初出)を「人肉喰いをするもの、しないもの」(『岩波全集』)に改めるなど、元兵士に対する配慮の感じられるものもある。

(7) 単行本にまとめる際、最も多い加筆訂正が行われており、また岩波書店版全集が決定版とされているのでこの三段階を例としてあげることにした。

(8) 『マッカーサー回想記』(下) (津島一夫訳、朝日新聞社、一九六四年)

MacArthur, Douglas, Reminiscences, New York, Time, McGraw-Hill, 1964.

(9) 『フィリピンと私』(『読売新聞』、一九七一年八月七、八日)

(10) 「作者の言葉」〔『大岡昇平集 10』岩波書店、一九八三年九月〕

(11) 「フィリピンについて、これまでにまとまった書誌がなかった。池端さん（池端雪浦のこと 引用者注）の協力を得て、その歴史と地理について、網羅的な書誌を作った。」（フィリピンと私）という大岡の話からもフィリピン関係の文献の少なさが推察できる。実際『レイテ戦記』の「書誌」に上げられた文献名を見れば、一九七〇年の時点で日本語に訳されたものがごく限られていることがわかる。

(12) 「書誌」に記された『レイテ戦記』執筆当時の参考文献の全体において最も少なかったフィリピン関係の文献（約五十点）のなかでも、フィリピン人の手によって書かれた書物は三分の一（十六点）にすぎない。そのうえさらに戦時中のフィリピン人とゲリラに関するものは、非常に少ない。フィリピン人の視点が少なかったのは、こういう文献の制約とも関係があるのであろう。

(13) 大岡昇平、いいだもも、対談「転換期としての戦後」〔『文芸』、一九六九年四月〕

（名古屋大学大学院博士課程後期）